

3 COMMUNICATION TIME

コミュニケーション能力の向上

島田 拓哉

本論の要旨

本校では、学級劇の取り組みを40年以上続け、文化祭での発表を行っている。この学級劇を教材にして、平成22年度(2010年度)からの「情報学活」を経て、平成25年度(2013年度)に「COMMUNICATION TIME(以下CT)」を開設した。CTの目標は、仲間や観客を意識したコミュニケーション能力を培うことを目指していて、これまで、CT全体のテーマや各学年の目標を提示し、教員間での指導内容や方法の共通理解、教材の整理・充実を図ってきた。その結果、学年の目標に沿い、各学級で設定したテーマを意識した、魅力的な学級劇が増えている。

本研究では、本校で取り組んでいる「課題を主体的に見出す学習指導」とCTの関連性を明らかにすることについて考察する。

キーワード 総合的な学習の時間、学級劇、コミュニケーション、課題を主体的に見出す

1. CTの概要

(1) CTの内容

CTの歴史は浅く、平成25(2013)年から始まった学習である。しかし、学級劇として考えると、BTよりも長い歴史を持っていて、40年以上続く本校の素晴らしい伝統である。劇の完成に向けて大変多くの時間を使って準備を進める生徒にとっては非常に大きな行事である。本番においても割り当てられた時間の中で精一杯取り組んでいる生徒の姿が見られる。本校における学級劇は、2日間にわたって各学級の劇を互いに鑑賞しあうことで、先輩たちの劇を見て良さを学び、表現力が磨かれるという伝統の積み重ねによって現在にも残っている大切なものだといえる。

CTでは、学級劇の完成を目指してテーマを設定し、自分たちで役割分担を決定し、それぞれの役割で活動を行う。そして、リハーサルを行い、自分たちで分析して改善していく。最後は、文化祭でその成果を披露し、振り返るといって一連の学習活動である。学級劇を作り上げていく過程においては、意見の相違から課題が出てくる。人と人との交流(コミュニケーション)を通して、そのような課題に対して解決することを目指すものである。

CTのテーマは、「表現を大切にする文化を育てる」であり、その目標は、「相手を意識したコミュニケーション能力の向上」である。「相手」とは「仲間」と「観客」を指している。ともに劇を作る仲間を意識し、劇の成功に向けて問題を解決していくコミュニケーション能力の育成と、「観客」を意識し、劇を通してメッセージを伝える表現力の育成を目指している。

CTが生まれたのは、平成25年(2013年)で、本年度で6年目となる。平成23年(2011年)から2年

間は「情報学活」という名称で、「情報の時間」で取り組んでいた学級劇に関連する部分を分離し、観客を意識した学級劇制作に取り組んでいた。それ以前は、学校全体の目標や学年でのゴールは定められておらず、生徒の主体性に非常に多くの部分を任せた活動で、担任に指導の大部分を任せられた学習活動であった。よって、劇を作る過程において、役者や大道具といった役割を越えての話合いの場面などのクラスみんなで劇について議論する時間がほとんど見られなかった。その結果、劇からメッセージが伝わらず、何度も場面転換を繰り返し、時間も超過する劇が多く、自己満足に陥ってしまうことも少なくなかった。

そこで、劇の作り方やアイデアの出し方、さらに話し合いのさせ方などの手段・方法を学ばせる時間が必要であると考えた。そのヒントとなったのが、同じ時期に研究を進めていた「情報の時間」である。思考ツールを用いて分析したり、整理したり、意見を述べたりすることをCTにも取り入れて、授業づくりを始めた。また、学年ごとに達成目標を設定した。初めて取り組む1年生は「伝える学級劇」をテーマに、自分たちが満足できる学級劇を、わかりやすい表現を心がけながら作ることを目標にしている。2回目の2年生は、観客に目を向け、「魅せる学級劇」をテーマとして、観客を魅了する、感動させられる学級劇を、表現を工夫しながら作っていくことを目標にしている。そして集大成となる3年生は、「心に響く学級劇」をテーマに、見せ場を考えたり、新たな表現を作ったりしながら、自分も観客も感動できる学級劇を作り上げることを目標に取り組んでいる。

COMMUNICATION TIME (CT) 年間指導計画

CTの目標		<p>★「表現を大切に文化」を育てる！ →相手を意識したコミュニケーション能力の向上</p> <p>①「仲間」を意識したコミュニケーション (劇の成功を目指し、問題を解決し、決定するコミュニケーション能力の育成)</p> <p>②「観客」を意識したコミュニケーション (劇を通して、メッセージを伝える表現力の育成)</p>
1年生 「伝える学級劇」	25時間	★自分たちが満足できる学級劇を、わかりやすい表現を心がけながら作ってみよう！ (劇を知る・やってみる・仲間を意識して、劇を作る)
2年生 「魅せる学級劇」	26時間	★観客が感動できる学級劇を、表現を工夫しながら作っていきこう！ (相手を意識して、学級劇を作る・キャストの立ち位置や場面転換の工夫)
3年生 「心にひびく学級劇」	26時間	★見せ場を考えたり、新たな表現を作ったりしながら、 自分も観客も感動できる学級劇を作り上げよう！ (自分・仲間・観客を意識して学級劇を作る・学級劇の集大成)

展開		1年生	2年生 3年生	目標	内容
1次 題材	学級劇の目標を理解し、クラスとして何を伝えるのかと、劇の題材を決定する	0	0	CTや学級劇のねらいの取り組みを確認する	・学級代表者に対して、CTや学級劇の取り組みについてねらいや約束ごと(時間・テーマ)の説明を受け、各学級で伝える。(総合ガイダンス)
				『コミュニケーションルール』を作る。	・学活1時間を使って、各クラスで「コミュニケーションを取るとき」や「話し合うとき」のルールを作り、掲示をする。
		1 2 3 4	1 2 3 4	学級劇の目標達成に欠かせない要素を考える	・スライドによるCTの学習意図の紹介。 ・ビデオによる過去の作品の紹介。 ・目標達成に必要な要素を挙げる。
				学級劇のテーマ・メッセージを決める	・どの様な劇がやりたいのか、クラスとして伝えるテーマ・メッセージを何にするのか、意見を出し合い、根拠を踏まえて発表させ、クラスの意見をまとめる。
			劇の題材を決定する	・文化祭実行委員の決定、夏休み中にシナリオ作成(2,3年生)。 ・夏休みの課題の確認。 ・夏休みの課題として、映画・演劇を各自で鑑賞させ、「心にひびく」要素を分析させる。(3年生)	
2次 表現	目標を意識しながら、各役割・立場における生徒のコミュニケーションを通して劇の表現を工夫し、学級劇の質を向上させる	5	5	劇の役割分担をする	・文化祭実行委員から劇の流れの紹介。役割分担を決める。 (例)「幹部:演出/舞台監督/助監督」 「照明」「音響」「映像」「大道具」「小道具」「キャスト」
		6	6	劇における役割ごとに工夫を考える	・過去の学級劇やプロの劇等を見て、劇におけるそれぞれの役割の工夫を探り、学級劇に生かせることや取り入れたい要素について話し合う。 ・場面転換や劇のクライマックスをどうしていくか、検討する。 (*1年生・立ち位置・2年生・場面転換・3年生・クライマックス)
		7	7	第1回検討会	・各部門での具体的な取り組みを話し合う。 ・各部門からこれからの計画や方向性を発表し、話し合う。
3次 実践	目標を達成できるよう、学級劇を立案し、練習や製作など具体的に実践する	8 9 10	8 9 10	各部門による提案・分析・改善をする 各部門で準備をすすめる	・各部門での取り組み(練習や製作など具体的な取り組みを進める) ・2時間枠の初めに今日やることを各部門で確認、全体で交流する。
		11	11	第2回検討会	・各部門の経過報告を行い、方向性を話し合う。 ・これまでの「コミュニケーション」について振り返る。
		12 13	12 13	検討会を踏まえて、各部門で話し合い、準備を進める。	・検討会を踏まえて、修正・改善を行う。 ・リハーサルに向けて、準備を完成させる。
		14	14		
		学 学	学 学	リハーサル	・リハーサルを行い、最終確認をする。
4次 発表	学級劇を実演、鑑賞する(文化祭)	15-24	16-25	学級劇を実演したり、鑑賞したりする	・学級劇本番 ・各クラスの学級劇を鑑賞する。
5次 振り返り	目標が達成できたか分析をし、評価をする	25	26	振り返る	・自分たちの学級劇のビデオを視聴し、目標が達成できていたか振り返る。 ・身についたコミュニケーション能力を振り返る。

- ・学級劇は、1年生20分(準備後片付けを含め30分)、2年生25分(同35分)、3年生30分(同40分)
- ・シナリオは1年生A4・10枚まで、2年生A4・11枚まで、3年生A4・13枚まで(シナリオ構成を早期から担任で指導)、エンドロールをする場合3分まで。
- ・1ページ(A4)で約2～3分程度になる。
- ・1年生は脚本集等から、2、3年生は脚本集などを参考にして、上演時間が極端に長かったり短かったりしないようにする。

表1 令和元年度 COMMUNICATION TIME (CT) 年間指導計画

(2)本年度のCTの取り組み

CTを開設して6年となり、どのようなコミュニケーション能力を身に付けたらよいかを明確化することを課題として取り組んできた。そこでコミュニケーション能力を高めるために、各学級におけるコミュニケーションルールを考える時間を設け、話し合い活動を通して決定する取り組みを行った。

3年生では、過去2年間の経験をもとに、「学級劇を作っていく過程において、どのようなことが課題になるか」をグループで話し合わせることから始めた。ここで洗い出された事象こそが、「学級劇を作る上での課題」になる。そのことを認識させた後、課題を解決するための手段を中心にコミュニケーションルールを考えさせた。

コミュニケーションルールについて考える中で、日ごろの他人との関わり方について振り返る機会となり、他者との関わりの中で大切にすべき事項について再確認することができた。一見すると当たり前前の文言が並ぶのだが、「再確認」という部分には一定の価値があると考えた。私の学級では、図1に示すものができた。

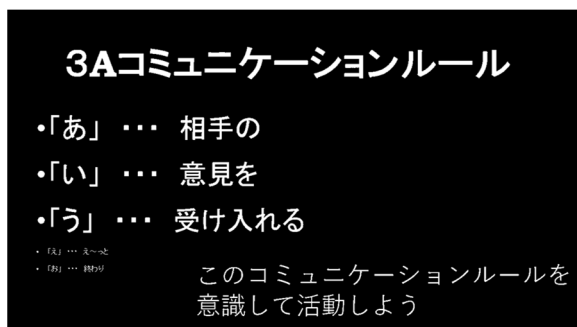


図1 コミュニケーションルールの例

各学級で設定したコミュニケーションルールを活かして学級で劇を作った。学級劇を作る過程は、①伝えるテーマの決定、②題材の決定、③脚本づくり、④役割の決定、⑤各役割での企画案作成、⑥各役割での制作、⑦リハーサル、⑧本番となる。本番までのすべての過程において、他者と共同で作っていくために生徒相互のコミュニケーションが生まれる。実際、互いの意見が食い違う場面が数多く発生し、そのたびに熱い議論が交わされた。時にはその議論が白熱しすぎることもあったが、その時にはコミュニケーションルールに立ち戻ることで冷静さを取り戻すことができた。このように、コミュニケーションルールを作る活動は有効な手立てであるといえる。ただ、議論が白熱しすぎる前にコミュニケーションルールを意識し、建設的で発展性のある議論が行われることが目指す姿であるので、その

点においては、今後の課題である。



図2 学級劇本番の様子

文化祭を終えて生徒一人ひとりに振り返りを書かせた。以下に示すのは、その一部である。

- うまくいかなかったこと
- ・全員に情報が行き渡らないまま進んでしまい、混乱した。
 - ・キャストと監督の意見が合わなかった。
 - ・脚本の修正による意見の食い違いがあった。
 - ・相手の意見を否定してしまった。
 - ・本番が迫ってくると焦って口調が荒くなってしまった。
 - ・言われたことの受け取り方のズレから考え方の違いが生まれて、ミスになった。
 - ・様々な意見がいろいろなところから出てきたときにまとめきれなかった。
 - ・個々がしたいことをするだけでまとまらなかった。

- 意識したこと
- ・文句ではなく、直接意見を伝えて話し合う。
 - ・自分の意見を積極的に言う。
 - ・部門ごとに意見をまとめ、それを少人数で集約することで議論の混乱を避けた。
 - ・相手の意見を否定してしまったことを反省して、次の日からは相手の意見を聞くようにした。
 - ・監督を通して各部門と繋がるために情報共有を心がけた。
 - ・話をする量や回数を増やす。
 - ・ギスギスした雰囲気にならないように仲介しようと思った。
 - ・疑問点はすぐに聞いて解決する。
 - ・できるだけ簡潔に話すと、相手の集中力が切れない。
 - ・「お願いします」などの言葉がけを心がけた。

○今後に生かせること

- ・ハプニングや意見が分かれた時、どうすればいいのか、どうしたらみんなをまとめられるかを考えられるようにしたい。
- ・自分のことだけでなく他の人のことも把握することで、ものごとがスムーズに進めることができる。
- ・人それぞれ学級劇に対する意識が違っている中でどのように協力していくかを考えることができた。このことは、すべてのことに当てはまると思う。
- ・大人数で何かを決定したり進めたりするときには、コミュニケーションルールを活かしていければいい。
- ・計画性を持った行動と、協力することを活かしていきたい。
- ・脚本の変更点を共有したり、計画的に準備を進めて行ったりする過程を通して、「仲間と協力して問題を解決する力が着いた。
- ・人と話すときに相手にはっきりわかりやすく話すこと。
- ・計画的に余裕をもって行うことが大切だと本当に実感した。それは普段の生活にも繋がると思った。
- ・一人一人の長所を生かせばよいものができる。

生徒の振り返りの中からは、コミュニケーションルールを頭の片隅に置きながら活動していたと推察することができる記述が多く見られた。

2. CT の課題

学級劇を作っていく過程を通してコミュニケーションの在り方について考えさせる取り組みを始めて6年がたち、一つの形として確立してきたように感じる。特にコミュニケーションルールを各学級で検討する活動はCTを進めていく上での核になっている。実際のところ、学級劇を作っていく過程においては、生徒の意見が一致せず、議論が紛糾する場面が時々見られる。その場面にこそ各学級で作成するコミュニケーションルールを意識すべき場面であるにもかかわらず、コミュニケーションルールを意識しているとはいいがたい生徒の様子が見られることが多いように感じる。文化祭という生徒にとっては一大イベントである学級劇であるがゆえに、生徒が傾けるエネルギーも非常に大きなものがある。そのような状況の中で、コミュニケーションの在り方を意識しながら他者と関わることができる生徒はそれほど多くない。反対に、他者とのコミ

ュニケーションを上手にとることができる生徒は、普段の生活の中でも多くの友人と良好な関係を気づくことができる生徒であるように思われる。しかし、実際の生活の場面には、意見の合意が難しい場合があり、多数決などいろいろな決め方がある。コミュニケーションルールを作ることによって、意見が分かれたときに、「いかに合意形成するか」を練習する場としてCTを位置付けることができる。中学生という発達段階だからこそ、CTの持つ意義は大きい。今後は、どのような取り組みをすることでコミュニケーションルールを意識して学級劇を作ることができるのかについて検証することが必要である。

また、舞台を見る側の意識を高めることが必要だと感じる。このCTのクライマックスは何といても文化祭での学級劇本番である。この本番に向けて多くの議論を重ね、すべての準備が行われる。演劇は、演者、音楽や照明などの裏方だけでなく、観客も一体になって作っていくものである。しかし、残念なことに近年、シリアスな場面であるにもかかわらず、セリフの言い回しに反応して客席から笑い声が上がったり、演者のアクションに反応してざわついてしまうことをしばしば目にする。このような一部の生徒が作る雰囲気によって多くの観客の意識が舞台から逸れてしまい、興ざめしてしまうということが起こっている。演者の演技力がもっと高まってすべての観客を引き込むことができるならば、このようなことは見られなくなるのかもしれない。しかし、学校での文化祭での演劇であるので、そこまで期待する方が無理だろう。だとすれば、舞台を見る側の意識を変える必要があるといえよう。「観客とのコミュニケーション」という視点からもっと観客の質を向上するための取り組みを模索しながら演者の演技力の向上を図っていきたい。

3. 参考文献

- 「滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要第58集」2016年
- 「滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要第59集」2017年
- 「滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要第60集」2018年
- 「滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要第61集」2019年